古今百番花

へ 13
3975

門へ13
號 3975

百馬鹿

式亭三馬戯作
歌川國直狂画

専用佳紙
精工刷印
不破不落

江戸書賈 山青堂梓

題古今百馬鹿巻首

此本翻刻禁止

夫馬鹿乃名目一なるべし。朝鮮紅毛いさまざまに。愚癡無智なるべし。卑しめられし。天竺流のお釋迦乃經論。頑愚蒙昧魯鈍愚愚なるべし。阿房漢名にして。癡呆白癡といふべし。唐山乃俗語を暗紀しるし小説家の切抜なり。和訓に「あほう」と譯すべし。以降。馬鹿に附る藥いなるべし。安本丹乃親玉あり。雲通玖。猿坊。ひやくたくさん。拔松。うんすけ。類を愛く古調いて。間抜。鈍癡氣。申。さる者を。近作に。号かるべし。余程置て来と貨物ふ。迂遠き言なりと。

太呂四郎。金什。禁太老。遠〻通〻隱語。捷徑。長七子
小面長。短を呼ぶ。不足〻す。たりけを糞ゆ拭すと想
脚脫に玉け賞。のふい如何。抑ぐらぐらを好觀物〻肇め。
のふ。ほのを可咲演劇より嫉る。斯て〻ゆ癡呆を拳て。癡く
馬鹿を畫さぐ。所謂百の口些〻不足欠空索子欠。伸き
鼻毛の。ぎて〻を竭す。結構人を癡律義を到頭バ全く
つげ〻なり。哥哥を伯父の上に立人支難く。賢愚を脫
作ぐ下に立人支難〻なんありけるを。〻か馬鹿の馬字を名
のく〻三馬といふ。癡漢あり。自己ぐ白〻ほそぐ栅〻拔下
〻世人の稽古を探〻。目て古今百馬鹿といふ。看

宮ゆしを閲すく〻し人を馬鹿こうしとふ。
素より兼知の文盲短才。寔ゆ華押するの人責任。
三本足らぬ戲作者がお利口らを顧れば。吾かぐら
吁馬鹿ら〻ざんす。云爾。
文化九年壬申九月中浣。京阪風か地方を告さバ。
常磐橋御門通淺草筋下ル本町。江戸言なるも。
本町二丁目の木戸の〻二軒目。惠を仰ぐ江戸の化粧
法の閲か筆を採る。

のゝ所謂金什本作者

式亭三馬戲題

楊枝隠八傳

の うと ん 御 目 印

式亭正舗

●吉例正月二日より松の内ときこえし新作 けいぶつ 世界ものしり

江戸のみや

百五十文

薄化粧 百五十文

御ひいきのあるひとおーろの

金勢丸 五十文

目あーひ

龍樹散

箱入ちとみうとさ 三十二文 五十文

正ゆいたくさう沈のうすみどり

蘭奢袋 百五十文

江戸本町二丁目南ゑび

式亭三馬製

小児百日どさん 奇薬百文

式亭一家名方

ちゃーの黒茶 代五十文

古今百馬鹿初稿標目

江戸戯作者 式亭三馬戯編

第一回 鼻毛をのびと亭主馬鹿

第二回 負て腹立つ下手象棋馬鹿

第三回 嫖客を叱る幇間馬鹿

第四回 腹自慢をする大食馬鹿

第五回より第百回まで著作出来の上追く用意仕い申候ゆえ板元

女房乃
豆腐
亞亭三七
鴨は蒲焼
料理の
鴨と
鍬ゆな
焼丸でも
女房
武亭三馬

鬼毛をのだてと出る馬鹿

女房このろけ色てい味ぐひよせこしちとせさるふ夫婦中ちとれあそこ
いさそんひもりとそうり根もなるもなすさとけうるとばあとそうとしふくく
めりり事注

●もとものいふ家ハ祝へけどどらつとハおりへこと
はなを見しくこうる　トむせうふぜそい祝いなるものいさらなりまぐて女房の
るとをすへ公おぢぞろ公のおそうあうひとろうれ
かとそんなどのらるろく
ぞいふさねうべー一体まと遠あるとさをまるものを浮へス
女房といふものハ内をまるふるの。事をといふものハ
外をまるなふりのぐそとぐどうるもとぐ祝るく
ふとなへいつとものぐとおりへがいて。男といふものハ外一

出るといろくの用がそろるもんぐ女房ハくかてまりは
ぐなるかど男といふものハ外へ出るべ用のそろる根
そのうちまと別しくまへなどハ娘こどりふぐり
つさの方ぐろ。ぐ用ハ多うらうのぐそそ云おつ
しやう祝へでとぐまいまをうぐ祝てそうまを夫ぐろ
おゆりもおそくなるうぐ又ハ浜海り日海りもぐぐい
まとものさ。生ぐの安うみお浜虚み波ちうはか
やとぐいぶん色るをぐ精お生ーなさいまぐそれい

おまへさんいち老と年ごろうがるてへ孫つうつきち
孫へりのさアイ。おまへ猪もいどのあてさりのこと姉妹
文字や豊猫をつまてくお丹もようごぞいませう。横
町のお損さんと周八が不のかとさんとあの隣のいろ
いろ半元服の娘をつまてく。芝居へお出があてさといふ
るもちろんと吵てそうまと。なるかど男を外と
ようふりのさ。その内ゆをおまへかど上をふおを
ようなふ者へあるもちよう孫へ。●こと云まついに逆戻る

像ど。あとへ何ごうアノ何さとそうり孫へとんご濡衣
と着るりんごぜ。あの芝居へ何ごうる。あと毛を呑太と
電坊ど張向で。もと小を往孫ろと中てう訥るのよ。
おうアア不ごと云くもきろずよ引ぱられてう。ぜひ
なく上乗で往さのご▲イエ。そとへきてません。そんな虚
でうのつうりどへよその女中ごふおうしやるがい
ろうりいまづ不義紀さ。なんぞといへばお友ぶち
而作よかづけく。おまへひとりいく顔をてごぞそりや

ちらつ〻みを耳や目がごぞいますと。ハテそれもよいのさ。
誰をこちらいらつゃいません。先ほどの甲ふをうな浮名
の立ぬ甲ようをさいます。●何の浮名が立ぬんり▲立ぬ
ことをいふのんでございますとろ。どうぞ納りがたくなるハ
紀ずきもせんよ。その内までお出ろうせん。ハテこちらこそハ形風よ
ちつてことお座ようしたなしゝ癖が失ひ孫へぐ。作りぐ
野暮さ●十二サ野暮ことおりふ孫へるる▲イヨく野暮で
ございますとこそんおんしやねんでを遺よかけこ

甲ぐ野暮ありのと婀娜みのあとろくべてへ。お否も
出ものりさぐいぶんよそのの娘ぢやお飯焚やお乳母
さんやお後家さんやおりなさるぐいく。男冥利ふをこ
ちさんおりんべこちらこいまちとのさ●コウをつるのを
云出しくこちらこちらぐ。おりこアの▲イヨ少ません●ウンニヤコ
おりこアこちらぐくも▲イヨきく耳ハのちません●ハテさうこ
のさんこの。おとろわぐ老実の者へ孫へぐ▲ハンあさりぐ
おれぐ。老実ことんろ忠が食く浮虚ことぷりさそこ

お屋敷あぐりの野暮が見ふをあきてきたぞ。ひろい
こどもへまぐーものろ。晴八が所の加アめぐ。なんぞ
いふとまきへさうんをはり出て来く。上向の果ハ
引へ出てく迫所の女子どもをいろぞいよいよびあつて。
おまへよおぐーもろものどやと酒よ考へとろよりもく。
どんぴくさうぞ相ふ。あの孔方だろも一年少いろ
のとおぐーめとと。そんやさつき命といふものを
あろうるへ。さ命といへばまもむるろ孫へ。よそのの

女中荒を大ぜいあつめて酒考をおごるうち
下ぐ。なくてなさるものろ。ろてが目見を始い
うーおまへのなさるものいうえる通ドまをよ。出ぬ白
本正ろーの使ぶといつく来ていぐ。行のあ年げよ
唄くろーパテナとろてろ一緒よ出くお出ろとろて
いさ。行の正へ連往くとろつく。そんつと書ろ様所
ろつてそろーべ。結縮緬よ屋板の巻をあて女
黒縮緬の出高祖頭巾とろぐつく。角の番屋八

立居きょろ〳〵ぴんとぼうぜんぼうぜんとしたそうやん。
何。おゝゝ▲いつさ皆まつてそうまをよ。おゝゝ呼ぶ
ゝでぼうぜんまをせう。きつと翌朝色を真青ふゝゝく
眠さうな顔でおゐるのをとつてぶ。はつと出る一日位少へ
ゆくお出ぐおつゝと晴八が所ぐらうと思つてゝゝ三と
お迎ふよつてゝゝ。成ほいさんぐりお出なさん孫へ。なぜと
きゝゝぐゝい虚を衝てよつゝゝ。あの晴八わどふゝいきつゝ
りのいなない。ホニ〳〵孫が喜ゝくなりやア孫へ。●事出れてお主

今までのお河更よ笑ふぐ。そんなはまゝ孫へうみと
ゆのとるりのゝそりやちぐゝそんなめゝあらう
ゝまぐ。それとあゝさまうい孫へのよ。孫つゝくまりやア
方思ぐ孫へ。おれぐちつゝくその通りゝ。金ゝゝ吟つゝく
まつゝくも。おゝんが儲あるゝさをゝゝくなて。酒ぐとのんで。
男しぐちつゝて居らをとちやア。あんまりそゝゝく
孫へ▲ゝとゝぐ男ふをちつゝゝうさゝゝゝゝしぐなく
てゝ法ぐきません。先刻もさうさ。お濱乃お妻さんが

ちよんとまるのとおそひごろ。往くまるのう宮
酒がたべまくなるのさ。そこへ往くイエラ
いろと拵へる。一ッ二ッ お銚子をたべくなると。野路さんや
遊二さんが来く大酒りとうるのさ●そこを能うげ
んふーてたべ出ものを。野路や遊二ら来く呼よ
へさんざーぺんとおりろーぐなるけるぺ夢を
をさーおいく男の中へ寄込もを出来さねへ中つ
おりゃ中さりちい嫌ぐぶ肉を綱る。女房の浅ぐやあ、

りんへく考くまんが▲ハテ おまへでとあるまいぞ。どんな
好男が来てねゆうが不好でとせうぐやあ。メ野暮
ぐーかまひ人へもぶーぞ。たくひる紙出を人があ
てとぞそこへお嫌なさるどの堅義ぐーく不好な
ぞ。くないのさ。女房ふ不好をさとるゆうおまへ
でとあるまいス●そりゃあさうぐんしど。柄をまげりな
そうあさゆをとるる。恵体女乃方拍不好を長血
白血よりい悪いそんなりゃあ。おとそさりら

ぢやァ袖くぐあんまり踏対ふもうぞうしいのよ▲袖を
踏つけふしとことぐでいまもとふこ[illegible]
[illegible]ぢまり[illegible]ひ通りのをごりのを。
[illegible]ひ遊ぶ[illegible]
異と男ふまえをくい老相の[illegible]
ニレ。け格よりも荒るうち。縁入物なんぞい出来るゆん
ぢやァ袖へ▲江戸のあを渡ぶい▲付るうちどうぞ賞
て来くお異うさいます。娚郷文字や豊猫ふも賞く
お米ぐでうち。ホニニ三馬ぐ面の洗化粧といふ顔の茶を消

まーぶいうをくのうまうとよ●道理ぐ美しいと思
ふ▲ちやいやよ。ちと袖へ洗化粧へあーひ粉おをかうし
自粉おをかるーいうを調法ぐぐでいまもとよ●そもとふ
お来よ入くお仕合せ▲ハイくト[illegible]おきへのおうこさん
おへ髪と髪結さんよ結うをちう。茶筅を外へ出しく
縫うをるのぐちお意ぐ。ちーの外うよ髪をひとりを
結ひ。まぐり形ふを神を通さ[illegible]ふ通上
りのへお嫌さ●かんぷりをと▲女房を床の間の

意地わるこさてさてさうおつしやるでござらう唐土の獅子の
面の布袋さまとおんあがらせあつらへくださん
ぞう引合ません●久しいのさゆう面田崩の宮
右ちくなんつてぞナント ちと風を換へうハイく
樽まとをとを。殿さまのは喜なり何なりと換ませう。
糸繋しでも。剃下奴しでを。おをゆ●あの面
笠。庁まづ居りさにおそをとてそれでを
町風おん急ぶなくまたなりのさ●さういひる

うん。尾上殿とおん形を。おんぶ口を酸くして剃頭世
話女房にまつこんこん亭主の山丹精ごとをひかハまい
さうとん襟を剃付くお異方さのきーか●そ剃く
かちう。おめんのん襟ぶ好うく剃帰ぶまるハきたい
上てう下てうさ。山招か坊主襟をつらめく●そこで
亭主の欲目ハいやよ●杜若よ田之助国之助とおん
下ちと調合しく かつくりくりてんハそのぼごりのを
世間の嫁ばごちぶ遠ん義ぶ●ナニサ少くだりくく

些細ふうもさ。ト女房のまへでたうりうろ男めうもちも ト キニ今 緒を入れるまへと

松坂屋うう京へ漕よ。ちんさ縮緬。多うあど上ういい。

なんぞ路考茶ろ▲イエ媚茶さ●ゆいりい。媚茶よ黒裏

といえ。ひ茶つく裏模様とそんぞ▲黒裏ハあん

きりたんとあうう裏模様よ赤ゆうさおきえの泡

みでえ模様さく黒裏ぞ。山模様を可愛らしくく

よい茶へ●そいつとおとよ好きせうと臺南風ん

琉球芋よ。海嵐の弧漢さちらうしあつふもる▲ヨやいうさ

うのそとうしへ海嵐ハたきしひさ●ヨニさうぞつけ

▲お門遠さ●おとと嫌ぞぶ海嵐ハ女の好くものよ▲食

物のさうのぞ出ぞう意地の悪いぶぞ。おいしいゆぞ

なぞうそんさ。なんぞお驕ちゃえ。暗ハ公平へ行ぞう

とうく●甚ぞ否味をこうちゃ氣ぶ茶へそんう

野路の遊ニよ茶ぞうる▲いきと茶へ変ぞ茶。ど生

けんさい●今ハ魚甚ぞ来ぞうう▲閉ぞ

いやぞうさ。女房少へ宿で者と扶なんんぞ

●ア又いつぷ。穿うおそそろぷ。ま平ゐすり。桃ハ子
冬鰊うりと作付するべくい▲このふいてそそろ子。おすん
ゐ好きりのをさ。但し女ハのけく●豊ハそろう又いぷ
ハテなんでとゐ人のゐ好き▲釜碗蕗の中へ金海苔を
入ないのをたべさい子●そをぎりう▲いそ〳〵なぐらるる
りの。女といふりのハゐ毛けしを者を騒うしいゐ立ぶ
ぜそをたんとハ騒りいない●釜碗蕗へ翌日せ芋を
えをそく。九三のを食せうう▲そをハありぐしい法人

そんそう若ハ何よせう子ゑ下ハさ〳〵さ三ゐ中そ上へ
何よせうう●さ〳〵さ三ゐ子ぞハ子ゐ毛ひきんくいぐ。黒
裏がそんうり拭ふといふ出ぐ〳〵ぐが利居る▲裏有も
真田へ倦そう〳〵置ておんうそハます〳〵●買ぐ。
そう〳〵月買〳〵めぐ。穿う倦そう▲真田しを焙く
●ぐ〳〵緒ゐぐをそるぐい▲小僧でハあるまい●三
足の拭ゐ結と四五足溜〳〵そうう▲あをハ浸く
拭ようりそんさ子●大造ぐ▲そをぐを女小法金を

つゝ入りハ●アレサヌ又さぢまんぐぷ。うんでと買こゝろの。
一体三足の駄下駄おもくんの道中をる時履くものぞ。
今ぢやア町の女が皆履く格よりうんぐぷ。ろくとの芝居
い襦を買ふく三足の駄下駄がよくらう▲ラやくけゝ
ぢやぺュニヤ。あの。小僧よさうこの。江戸の名乃語ふを
買ひたく。あとゝの向側の江戸桶で。常磐香といふ
びんつけを三本。あとハ三十二銭ぐらゐよ。其ほかハ日ふ
玉屋で紅を百匁。まつけ寒の紅ハ丑の日ふ買ふう

世ぐらぐよつよ。白粉ハ落化粧が大切
紙後屋で黒猪猫の頭巾をこれらうや●頭巾ハ三銭
ゝを買ぺぜ▲去年ゝのでぐさいまゝと●ゝ買ぺ
▲巾袋も瓢簞ぢの尾張の指巾袋よ。
あとゝのハ丈夫ぐ縫ぐよハうゝ●寒ハ七巾
履くぐぜ▲髪結さんよ結せるおくさんがうゝ
てん巾袋位ハよのゝ●ハ巾ふさんとこさんさ
おぐぐいまゝとよ戸棚へ嵐が這入さうぐ。湯具箱をう

ざんみかぐらくみ。たんと二度ゝ湯具をすぐ
噛裂まゝ。ホヤ腹ゲ立てくなゝ拵けどと畜
どゝ。まづ早速拵ぐやなゝ。
あとと絨後屈ぐ白縮緬を一反。ユウ。宮ぐらい。
一反とんどうぐ噛裂ぐ分を。別製まと。ヨウひと
きとぐつて製く立てぐい。遊ぶ濃ゝ。そとでも糸ゲ
きとゝまどんパテ者ゝ他面のおゝとさんゝちのやうゝ
縫物をさんさと紛へ。とうゝえくい。湯具ぐゝ。

ものさ。そ。ふさ。夫ゝ。コレ三ヤ。小間物屋乃口松ゲ
来ゝ。氏男の櫛を返ゝとのぐゝ。おの方ハゝゝゝ拾両
の櫛ゝゝ甲ゲ悪ハ。そゝてあのだゝ。猶の方ハ三両ふ負ゝ。
なゝ不ひ挿ふ立てく立てゝト。コウ。だゝ猶もいゝゝ。
ぢやゝ拵ハ。むぐゝ。ぐゝぐ。むぐゝ。ぐゝ。ば。むぐゝ。ぐゝ。試中ゝ
をゝとてくゝの面ハゝ。おゝ出ゝてくゝとむゝ。ス。チヨリ。そん
なゝむぐゝとなゝ拵ハ。ぐゝふさ。サゝくゝ。ゝを。ゝゝ。
かゝとぐゝ。ゝを入とてくゝ。ゝゝ。ゝ。ゝ。

百亭三七

お滝よ。そこを引張りなさんすな。●ドレ式紙入物
ヲヲト糸細ク〳〵ト上の方へ昇りて　▲アレサ。其紙を引張んだらア西
くなりまさアな。●どうもるのだ　▲大概きれるまんだ。
其紙を表方の袖の中へ入れて押つるのアレサ。其紙
衝ふ〳〵て。●衝ふ〳〵。ドレ。ハテナ。是だらア蜻蛉ら　▲アレサ。右の
紙を左りの袖へ入れて。左りのまをとらん。●ヲヲト
ようく。ようく　▲そりゃ。ぐさりうまを為るく
●ヤ是は大没だ。ユレ三ヤ宮へ行くく是は。●ようこそ

仕ようぞといよ。邂逅い旦那中とあいるのをさせヤ
い。幸抱甲斐のないるさ子ヱ。三ようを仕せると紙が引付
て上ようよう。だいるふうまとるか　トいひながら下おの
ようく。森神さるもの仕るまとるさうでやあの浪紙が
多い。ホイく巻角上あの浪紙が入るとどやあと
多いものさ子。ようく下およ紙の多くする。間へ盗物の
多が上ようといふう樂へ樂だアなうよう。ゆうく
上ようせうや。月へ紙つぞ。何をそる浦とすへ是ぞう

化粧とゝろのもの〳〵ゑへ・かゝろの本地ゞもゝんゞ
▲コレアレあんうるのゞんつゝり・そゝふつゝの活化くゝみるゝ
別〳〵ヤシヤゞュウゝとゝの魄不へゝ〳〵烟鍋ととんゝそゝんる。
おゝへも一盃飲る。ゆゝゞ永ふ中ゝゝ。まゞ其間をゝこの
下ふある皿をゝゝとゝゝへ鴨の擬燒をゝて食ゝゝ。ラット。
擬形を寄へ呉ゝる。ュウ。そゝちゝを向てゝんゞる今ゝ結ゝゝ
お髪。どんゞ根掘がゝ。今ゞゝゝ髪下ゝはゝゝ掘へのを
ゝゝゝ